

文人たちが描いた大宮公園と青年像 森鷗外「青年」など

沼田尚道

大宮公園の風景に浸りつつ、明治・大正・昭和、そして、平成の今日へと移ろう季節と滔滔とした時の流れに身をまかせるとき、この地を訪れた文人たちのことを思わざるを得ない。正岡子規、夏目漱石、寺田寅彦、樋口一葉、森鷗外、永井荷風、田山花袋、国木田独步、正宗白鳥、森田草平、太宰治。首都東京の近郊にあつてこれだけ多くの文人が時を隔てて訪れ、また、作品に描かれた土地はないだろう。本稿では大宮公園を舞台として描き出された青年像と大宮公園が文人たちに与えた影響などをまとめる。

一、大人とは裏切られた青年の姿である 太宰治「津軽」

《大人とは、裏切られた青年の姿である》

これは昭和十九年の作品「津軽」に示された太宰治の言葉である。大宮公園は明治十七年に開設され、大宮駅の発展と共に歩みを進め、昭和初期の改良計画を経てほぼ現在の形となった。太宰が大宮に滞在した頃の大宮公園の姿は明治の文人たちの目に写った公園の姿とは大きく異なる。また、太宰が「津軽」を執筆したのは故郷・津軽への旅を基にしており、太宰が大宮を訪れたのは「津軽」の成立より後年のことであるから、太宰は大宮公園に関してこの言葉を使ったわけではない。しかし、明治以来の大宮公園の姿と大宮公演を描いた文人たち、そして、明治の文人たちの描いた青年像を思うとき、太宰のこの言葉が筆者の脳裏を離れないのだ。

「津軽」の発表から四年後の昭和二十三年五月十二日に太宰は「人間失格」を大宮で完成している。この執筆中に滞在先から三鷹の妻に宛てた手紙が「太宰治全集 第十一巻 書簡」の最後に掲載されている。五月七日付けの大宮市大門町三ノ九 藤縄方から東京都下三鷹町下連雀一・二三の妻津島美知子に宛てた葉書である。太宰は《この環境なかなかよろしく、仕事は快調、からだ具合ひ甚だよく、一日一日ふとる感じ。》と綴っている。

この手紙に先立ち、五月四日付けのはがきで妻にあて《この住所、誰にも教へぬよう、「筑摩に聞け」と言ひなさい。》と伝えている。太宰は四月二十九日に大宮に来た。太宰が大宮に来た背景には筑摩書房初代社長・古田晁と大宮の関係があると言われている。五月十二日、「人間失格」を完成した太宰治は大宮を去る。その完成から一箇月後の昭和二十三年六月十三日、大宮に同行した山崎富栄と共に玉川上水に身を投げた。発見されたのは六月十九日。太宰治の誕生日でもある。この日は桜桃忌と呼ばれる。「津軽」で《大人とは、裏切られた青年の姿である》と綴った太宰治。最後の完成作品「人間失格」を大宮で書き上げた昭和二十年代の太宰治に思いを馳せつつ、視点を明治期に移して行くことにする。

二、明治の青年だ！ 永井荷風「野心」

《大人とは、裏切られた青年の姿である》とは太宰治の作品「津軽」の中の言葉だが、永井荷風「野心」の最後に描かれた大宮公園の場面を彷彿とさせる。「野心」は明治三十五年四月八日美育社から発行された。

「野心」は耽美派と言われる永井荷風らしからぬストーリーを展開をする。老舗商家の長男簗島光太郎と、その家に雇われていた奉公人佐吉のそれぞれの野心（すなわち、燃え上がるような野心と、牛のように鈍重に地の底から這い上がるような野心）が対照的な形で描き出されている。

《簗島光太郎は明治の青年だ！ 老人は相手にせんのだ！》

親類会議で、主人公の簗島光太郎は、親族の七名の年寄りを前にこう叫んで席を立ち去る。彼は《熱誠と強固なる意志の力を以つてせよ。》という熱く強い意志を持った野心家である。日本橋通りの半襟問屋田島屋という老舗の若旦那であり、五年前に商業専門学校を卒業、三年前に父親を喪つて莫大な財産を意のままにすることのできる位置を得ることになった。その田島屋の蓄積した財産を元手に《必要な品物は日本の物は無論の事、欧州諸国の新流行品から、上海辺りの品物迄、尽く有り」とあらゆる小間物化粧品手道具の類を一手で売買する商會に変へて了ふ計画》を実行に移そう

というのである。その簀島の前に障壁として立ちほだかつたのが、母親が進めようとする妹の結婚話であつた。父親の残した資産の半分を妹とその婿に持つていかれてしまうことになれば、簀島の野心的な計画は成立しなくなる。妹の婿候補者というのが田島屋に長い間奉公してきた佐吉である。佐吉は《誰が目にも忠実なそして勤勉な若者》であり、《牢獄のやうな流通

の悪い空気の中に其身を閉込め、凡て心と肉との自由を禁圧して居る結果から来たす、卑屈な不活潑な一種不快な色は、全くこの若い盛りの容貌を血色なく暗然と曇らして居る。けれども、又一方には、恰も牛のやうに太い頸をした生付からの頑丈な立派な体格を見ると、其の何処かには、猶人に優れたる猛烈な気力と忍耐力とが潜んで居るやうに思はれるのであつた》といつた青年である。簀島の母はこの佐吉を簀島の妹おみよの婿にして財産を半分分けてやろうと考えている。佐吉も長年に亘つて耐えつつ、行く行くは老舗の暖簾を分けてもらひ独立することを心に描いていた。陰鬱不活発ではあるが忍耐力のある青年が地面の底から這い上がってくる野心である。

妹おみよの婿のことで開かれることとなつた老人たちが中心の親類会議の場で、簀島は《簀島光太郎は明治の青年だ！ 老人は相手にせんのだ！》と叫んで席を立ち、自らの計画を突き進めた。同時に重大な過ちを理由に挙げて佐吉を家から追放してしまふ。佐吉にしてみれば九才の時からそれまでの忍耐に忍耐を重ねてきた奉公が全て無になつてしまつたわけだ。

それから三日後、簀島自身の進めてきた商会はほぼ完成した。順風満帆の簀島は友人島田とその妻の門出を祝うために三人で大宮公園に来た。

《夕方近く、二人の青年と一人の愛らしい少女の三人連れが、此等の喧しい評判からは全く遠かつた大宮の停車場から、深い緑の樹陰に其位置を占めた或る旅館に這入つた。》

宴も盛り上がり、一息ついたところで、簀島は島田と夜の公園の散策に出る。この当時の大宮公園の様子がよく表現されている。

《酒宴が済んだ時、二人は障子の外の月光を望んで、静に公園の深い森の中へ酔ひを醒ましながら歩行を移す事となつたが、然し談話は猶以前の問題を引續けて居たのである。》鬱然と生茂つた森の中に玉のやうな月の光は自由

に二人の行手の、細い小道を照らして居る。天地は寂然として全く平和なる眠に就けるもの、如く、木の葉の戦ぐ音さへ絶した。森を通して透かし見ゆる広い平かな野の面は水色に澄渡つた月の光を浴びて、丁度静止せる湖水の表面を望んだかの様。そして其の上に散在した幾個かの遠い樹の茂りは恰も緑色の小嶼の浮べるが如く看做されるのである。》

《野心は熱病》などという会話をして夜が更ける。翌日は三人一緒に公園の森を散策。そして、この晩も簀島と島田は夜更けの公園を散歩しながら《熱病》のことを話題に話し込む。そこに一通の電報が届く。簀島はあわてて封を切り、夜の公園でわずかな月の光に透かして読んだ。電報には、《放火の爲め、商会は火事最中、直ぐ帰れ》と書かれていた。

立場の異なる明治期の青年の野心と野心の相克の結果である。「野心」は《今、更けた夜の鐘が静やかに聞こえ出した。》と幕を閉じる。

ところで、簀島の野心を中心に進むストーリーの背景には、《私の心配するのには、お前の云ふ様に老人の取越苦労かも知れ無いが、今迄幾代と続いて来た家の身代を、お前が自分の名前になつて居るのを楯にして、自由自在にしてはうと云ふのだから、是は親の身として心配せずには居られないぢや無いか》と言つた、長く続いてきた商家を守ろうとするおかみさんであり、同時に、簀島の母親の姿があつたことを見落としてはいけない。

三、行春の名残、散る花の哀れ　　〜永井荷風「歓楽」〜

《恋は青春のみが知る歓楽である。歓楽は美しい美しい夢である。》

永井荷風は、明治四十二年七月一日春陽堂発行の「新小説」の巻頭に掲げられた「歓楽」の中でこう述べた。そして、次のように續けている。

《私の愛する藝者は或る夜私に向つて、思はぬ人に落籍されねばならぬ。私と一緒に逃亡して呉れるか、死んでくれるかと迫つた。悲哀は美しいものである。悲哀ほど強い誘惑を持つてゐるものはあるまい。私は直ちに死なうと約束した。私の心は数知れぬ美しい幻影に満たされた。》《ふいと驚いて我に返ると、今度は猛然として、私は此の感激、此の恍惚の凡てを私の力かぎり

歌つて見たい願望の、押へやうとしても押へられぬ余儀無さを感ずる。藝術の野心と云うか、現世の執着と云はうか。或は単純なる人間の本能と云はうか、兎に角、私は死ぬ前に、実在から消え滅びて仕舞ふ其の前に、自分の影を留めた何物かを残したい、其れだけの望みに駆られて、私は飄然として足の向いたま、大宮公園の旅宿に赴き、非常な情熱を以て筆を取り始めた。》

続く段落での場面は、大宮公園の旅宿で筆を取ってから五日後に移る。

《五日ほどして、私は『行春の名残』と題した自叙伝とも云ふべき一篇を懐中にして、若し此れを発表するならば私の死後明治の文壇は如何なる驚嘆の声を發するであろう。散る花は哀れであつて、再び返らぬものは皆懐しい。世間は私の才を惜しむであらう、惜しむにちがひないと、又もや此様空想に酔ひながら、私は大宮の松林を出て、間もなく汽車で上野の停車場にいたのであるが、…》

まるで「人間失格」を書き上げた太宰治を見るようだ。筑摩書房社長に大宮に執筆の場を提供された太宰治もまたこのような思いを胸に秘めていたのだろうか。「花吹雪」において森鷗外と同じ禅林寺に墓を持つことを切望し、実際禅林寺に眠ることとなつたほど鷗外を尊敬してやまない太宰治のことだから、鷗外と交流のあつた永井荷風からも影響を受けていないはずはなく、大宮公園を舞台とした荷風の「歓楽」や「野心」も読んでいたことだろう、などと想像することも大宮公園の探訪に興を添えてくれる。

大宮に滞在した数日のうちに一篇の作品を仕上げ、早々に汽車で東京に戻るといふところまで太宰治と同じ道筋を辿っている。しかし、「歓楽」の続く文脈は、太宰治とは異なる方向に進む。「歓楽」はこう続けている。

《丁度晴れた秋の夕暮、本郷の家路へと、不忍池のほとりを歩いて行く時、》
《私の胸一ぱいに、押へ切れない生活の興味、生存の力を感じさせるのであつた。》
《晴れた秋の日光はあまりに美しかった。私は情死の違約をどうして辯解すべきか、差詰めその方法に窮した結果、身の所在を恋人の手前から隠して仕舞ふより仕様がなと思つた。》

大宮公園で一篇の作品を仕上げた後、秋の夕日に生活への興味と生存の力を感じたというのだ。大宮公園が文学を志す青年の心に変化を与えた。

四 明治二十五年氷川公園にあそぶ 樋口一葉「につ記」「書入れ」

《明治廿五年秋八月朋友田邊たつ子と共に氷川公園にあそぶ 此日天色玲瓏として眞に秋光身に餘るか無一物の「囊」》（書きかけのまま中止）

樋口一葉は明治二十五年八月に大宮公園を訪れた。「樋口一葉全集」に収められている日記をたどつてみると、一葉が東京に生まれて以来、初めての、そして、唯一の遠出の目的地が大宮の氷川公園であることが分かる。右に掲げたのは「樋口一葉全集 第三卷（下）」に収められている「断片・書入れ」にある記録である。

同全集第三卷（上）に収められた「につ記」には次のように記されている。師匠である萩の家の中嶋歌子に誘われて汽車で出掛けたことが分かる。



写真1 絵葉書 官幣大社氷川神社大門杉並木十八丁ヲ望ム（筆者所蔵）



写真2 絵葉書 大宮氷川公園蛇松（筆者所蔵）

《廿六日 晴天 早朝師君のもとに訪ふ 大宮公園に草を見むと誘はれて直に誘はれて直に十一時の瀛車にて行く 三時の車にて歸る》（※筆者注…IIは火へんに「禾」）

大宮公園の脚注には《埼玉縣北足立郡大宮町にあり、明治十七年に氷川神社境内を町營の公園としたもの》と解説されている。また、全集第三卷下の補注では《「氷川公園」は、府下北足立郡高鼻村氷川神社の東北に接した公園。》と解説されている。

また、大宮行きについての明治二十五年秋の書入れが、「樋口一葉全集第三卷（下）」に収められている。

《時鳥なく五月のはじめより菖蒲の根の心ながき友同志より合ひて八例の小田原の評定をなしけるるは此頃の新開などに埼玉縣大宮の公園地を面白き処可笑しき処洒落た処粹なところ風流な処雅な処と記者さま矢鱈にお褒めなされしより自づから氣が浮き立ちて何と參らうでハ御座りませぬか》
五月のはじめにこのような動きがあり、一葉は、水鶏がよいか、氷川の名物の蛸がよいか、などと延々話をしたりしていた。しかし、結局このときの大宮行きは立ち消えとなっていたようだ。《夢と忘れて一つは斗の庭に月を眺め風を待つて兎も角も夏は暮しつ》と一葉は記している。この記録を更に読み進めると、次のように書かれている。

《俄かに大宮の七草にと思ひ立しが、さればとて一人も行かれず連れハうるさし：…一時の瀛車で三時には歸る…》

初夏から氣に掛けていた大宮公園に秋風に誘われ出掛けてみたいと感じていた一葉は、師匠中嶋歌子に誘われて、氣心の知れた連れを得ることができたので、ようやく出掛ける決心がついたということのようだ。



写真3 文化人切手
樋口一葉（筆者所蔵）

五、貴下の側で何も氣に掛けないで一日眠りたい 〳正宗白鳥「微光」〳

明治四十三年十月一日発行の「中央公論」に発表された正宗白鳥「微光」には、大宮公園の萬松楼が登場する。明治二十四年九月に正岡子規が夏目漱石を呼んだあの萬松楼である。

《大宮の萬松樓の二階に二日ほど氣儘に遊んで、歸るともなく二人は上野の停車場に着いて、再び會ふ機會を約束して別れた》

お國と河津は、この大宮行きを暑くて煩い栃木の晃陽館の部屋で決めた。《せめて一晩でも知つた人のゐない土地で、ソーツと静かに寝かして下さい、貴下の側で何にも氣に掛けないで、一日眠りたい》

《ちや歸り途だから、大宮へでも寄るとい、んだが、僕は充分に金を持つてゐないよ》

《私、指環を質に置く、一度東京へ行つてお金を持てて大宮まで来てい、質屋では指環二つで二十円は貸してくれる、と言うお國に河津が応じる。《だけど、それを無くしちや困るだらう、後で買つて呉れた人に言譯が立たんぢやないか》

《い、え構はない。後はどうなつたつて構はないよ、私、かうしてお互ひに暑ひ思ひや厭な思ひをして詰らなく別れたくない》

この栃木の宿に来る前に、河津はお國宛てた手紙に《大宮の雪、湯島の月、忘れ難き記憶は爾後屢々小生を悩ましもし慰めも致し候》と書いている。河津とお國の二人には大宮公園の思い出があった。

今日、萬松樓の跡は児童公園となり、昭和二十五年に設置された回転飛行塔がゆるりゆるりと子供たちを乗せて回っている。

六、抱き合つたまま池へ飛び込んでしまったの 〳国木田独歩「第三者」〳

正宗白鳥「微光」がお國を中心としたストーリー展開であつたと同様に、国木田独歩「第三者」もお鶴という女性の生き方を中心に据えている。主題は性格の不一致による離婚問題。現世では幸せになれないことを苦し



写真4 絵葉書 大宮名所 氷川公園 (筆者所蔵)
松林に囲まれた四阿屋の向こう側には広く平らな野が広がっている(現在のポート池の場所)。永井荷風「野心」に描写された「森を通して透かし見ゆる広い平かな野の面」「丁度静止せる湖水の表面を望んだかの様」の風景だろう。

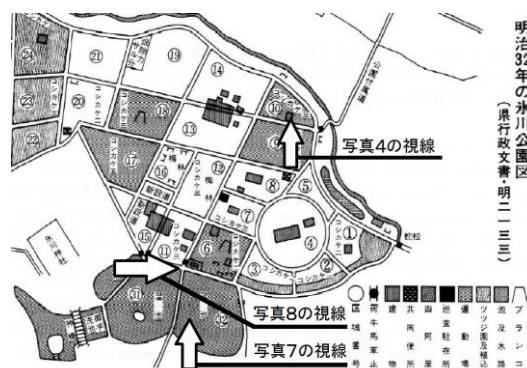


写真5 明治32年の氷川公園圖 (部分)
(出典:「大宮市史」第四巻)
写真4、写真7、写真8の視線方向を矢印で示した

て心中へと展開する。お鶴と江間との離婚話にお鶴の義理の兄・武島と江間の朋友・大井が仲裁に入り、武島と大井は手紙のやり取りをしながら、二人の円満離婚が成立するよう説得に当たる。そうした中で、お鶴は義兄に自分の見た夢の話をする。その中に大宮公園が次のように描かれている。

《未だ江間様と結婚しない時でした。江間様と連れだつて大宮に行つたことが御座いますね》《昨晚の夢も矢張その大宮。》《江間様の被仰るには此儘二人が東京に歸つて又夫婦になつた處で大井や武島の言ふ通り決して幸福ではない。》《夫れから二人で抱き合つたま、池へ飛び込んでしまつたの。》

武島の手元には江間から一通の手紙が届いていた。その内容は偶然にも、お鶴が武島に語つた夢の内容と符合するところがあった。お鶴は武島が引き出しに仕舞つておいたこの手紙を見てしまった。そして、お鶴と江間が鎌倉材木座の崖の下で心中しているのが発見され、武島の《江間君もお鶴も今は相携へて、お鶴が夢に見たやうな野邊を散歩して居るだらう、お鶴は心ゆくばかりに其好きな唱歌を謳ふて居るだらう。》との言葉で幕を閉じる。

「第三者」は明治三十六年十月一日発行の「文藝俱樂部」に発表された。森鷗外が認めた、独歩の最初の作品「源おぢ」も「文藝俱樂部」の掲載だ。

七. 大宮公園は静かなよいところ ～田山花袋「一日の行楽」～

田山花袋が見た大宮公園の様子が大正九年六月十六日に磯部甲陽堂から「東京の近郊」と題して出版されていることが、「大宮市史 第四巻」に紹介されている。ほかには、北沢楽天、正岡子規、森鷗外、寺田寅彦、中里介山、石井柏亭らが取り上げられているので参照されたい。

本稿では、「大宮市史」が取り上げていない大正七年二月十六日、博文館発行の「一日の行楽」と題された田山花袋の著書に注目する。同書は汽車を使って一日で訪れることのできる東京近郊の一三四箇所の名所が紹介されている。それぞれの名所が三、四ページくらいにまとめられ、個性ある特徴がコンパクトに解説されている。

筆者には、「一日の行楽」の大宮公園に係る記事が大宮公園を題材にした文人たちの趣向の方向性を端的に示しているように思えるのである。

《大宮公園は、静かな好い處だ。初夏の朝など殊に好い》と書き出された大宮公園の紹介に割かれた「一日の行楽」のページ数は三ページである。

花袋は、大宮公園を紹介する三ページ・約二〇〇文字の短い紹介文の中で大宮の地名について次のように紹介した。氷川神社の存在は大宮公園を語る際に避けて通れない重要な要素なのである。

《大宮は武蔵國では、一番古い地名で、氷川神社は景行天皇時代既にその存在を認められてゐる古社である。中仙道から右に入つて二三町、華表(とりみ)の三四町、杉や樺の樹の非常に大きいのがあつて、いかにも幽邃である。池があり、橋があり、その奥に宏壯な社殿がある。そして公園はその奥の松林の中にある。》

大宮の氷川神社は武蔵一宮。関東一円に数多く存在する氷川神社の中心であることは言うまでもない。氷川神社はスサノオ、クシイナダヒメ、オナムチの三柱を祀る。「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」は、スサノオが詠んだ日本最初の和歌であり、ヤマタノオロチからクシイナダヒメを救い、須賀の地に新婚の宮を建てた時に詠んだとされる。八雲は氷川神社の社紋となっている。大宮公園内にかつてあった料亭・旅

館八重垣の名はこの和歌から得たものだろう。クシイナダヒメはスサノオの妻であり、オオナムチはその子である。こうした神々を祀る氷川神社に隣接する大宮公園で明治の文人たちは野心と女性観とを作品に描き出した。神社と神社に隣接する公園の雰囲気から何かを感じ取ったのだろう。

「一日の行楽」は冒頭に《大宮公園は、静かな好い處だ。初夏の朝など殊に好い》と述べている割には、大宮の周辺にある名勝地についての紹介はごく短い。しかも、文末には次のように解説されている。

《この附近には、探るべき名勝が尠くない。》《しかし、大宮公園に行く人には、さういふ好事者は減多にない。盛夏はしかし蚊が多く、暑い。》

けっして風光明媚を賛美する内容と言えないものではないが、こうした田山花袋の視点は、明治後期から大正期にかけての大宮公園及びその周辺の状況を知るための良い参考になると考える。次章以降で森鷗外「青年」に描かれた大宮公園に触れ、その後、改めてこの話題に戻ってくることにする。

八. 恋愛の対象というものはすべて男子の構成した幻影―森鷗外「青年」―

森鷗外の「青年」は、明治四十三年三月一日発行の雑誌「昂」に掲載され、翌明治四十四年八月一日の号まで連載された後、大正二年二月十日に艸山書店から単行本として刊行された作品である。

「青年」は小泉純一が創作家になるべく東京に出てきたところから始まる。住処を定め、鷗外の家の周辺も歩く。有楽座で坂井夫人と出会う。《漂はせてゐなくてはならないのに、…正しい意味で生活してゐないのであるまいか》《生きる。生活する。…一體日本人は生きるといふことを知つてゐるのだろうか》《己には眞の生活は出来ないのであらうか。…花は咲いても、夢のやうな蒼白い花に過ぎないのであらうか》と感じ始める。

《夢のやうな蒼白い花》は「青年」の終盤を読むキーワードだ。純一は、大村と共に大宮公園に出掛けた。大宮公園は純一が最初に訪れた場所である。ここを起点に、純一の遍歴が始まる。坂井夫人のほかにも柳橋芸者のお



写真6 文化人切手
森鷗外 (筆者所蔵)

ちやらなど遍歴の場面には様々な女性像が描かれている。そして、箱根・福住の萬翠楼で坂井夫人と画家・岡村とが親密にしていると遭遇した純一は《どうも自分の身の周囲に空虚が出来て来るやうな気がしてならない。好いわ。この寂しさの中から作品が生まれなくても限らない》と考へ、坂井夫人と決別し、作家として立つ決意をするというのが「青年」のあらすじである。

ここで、森鷗外「青年」を大宮公園視線で読み込んでみる。人影の見えない落ち葉の散らばる広い道。遠くにかすかに三味線の音がする公園で、純一は大村にワイニングルの女性観について問う。大村は次のように答えている。

《女性ですか。それは餘程振つてゐますよ。なんでも女といふものには娼妓のタイプと母のタイプとしかないといふのです。》(※筆者注:「タイプ」はフランス語。英語なら「タイプ」、日本語なら「型」である。)

二人の会話は続く。純一の《それで戀愛はどうなるのです。母の型の女を対象にしては戀愛は満足は出来ないでせうし、娼妓の型の女を対象にしたら、それは墮落ではないでせうか。》という問いに大村はこう応じた。《さうです。だから戀愛の希望を前途に持つてゐるといふ君なんぞの爲めには、ワイニングルの論は残酷を極めてゐるのです。女には戀愛といふやうなものはない。》《戀愛の対象といふものは、凡て男子の構成した幻影だといふのです。》

大村のこの言葉を受けた純一はしばらく言葉もなく、《坂井の奥さんが娼妓の型の代表者として、彼れの想像の上に浮》んだ。そして、搾り出した言葉が《そんな事を考へると、厭世的になつてしまひますね》だった。

そして、二人は氷川神社の拝殿近くにやってくる。その後の二人の会話の話題は女性論から純一の文学者としての文筆活動のことに移る。

純一は同行した大村の《まだ何も書いて見ないのですか》との問いに対し《蜚はず鳴かずです》と公園の沼の枯葦の茂みに立つ杭に止まっている一羽の鴉を見ながら答えている。公園内に三味線や歌の聲が聞こえなくなり、《もう五時を大分過ぎてみます》《道理で少し寒くなつて来た》との会話の後、《二人は暫く落葉の道を歩いて上りの汽車に乗った》。

大宮公園の門を入ってから氷川神社拝殿近くにやってくるまでの純一と大村の会話に注目したい。女性の二つの型と文筆家として立つこと。これら二つの命題が大宮公園を舞台として提起されている。このことを念頭において「青年」を読み込むと見えてくるものがある。

本稿前出の永井荷風の二つの作品「野心」と「歓楽」を思い出してほしい。これらとともに大宮公園を舞台としている。そして、「野心」が母の型（と言うより母の姿そのもの）を描き、後に「歓楽」が娼妓の型を描いていることに注目したい。これらはそれぞれ明治三十五年四月と明治四十二年七月に発表された作品であり、永井荷風は、まず母の型を描き、その七年後に娼妓の型を描いたのだった。

森鷗外が「青年」を「昂」に連載開始したのは明治四十三年三月。すなわち、永井荷風の娼妓の型が描かれてからすぐ後、永井荷風が作品の舞台として選んだ大宮公園を、森鷗外もまた、「青年」の舞台の一つに選んだことになる。そして、鷗外は、女性には娼妓の型と母の型の二つの型しかないというテーマ(主題)の提起を、大宮公園の場面で純一と大村との会話に担わせた。しかしながら、「青年」には、娼妓の型の女性は坂井夫人をはじめめとして複数が描かれている一方、母の型が全く描かれていない。また、それが何故かの説明も描写もない。母については、一箇所、純一が古道具屋を覗く癖について説明する形で、次の短い回想の場面があるのみである。《純一は小さい時、終日其中に這入つて、何を捜すとなしにそのがらくたを掻き交ぜてゐたことがある。亡くなつた母が食事の時、純一がゐないといふので、捜してその歳まで来て、驚きの目を睜つたことを覚えてゐる。》



写真7 絵葉書 大宮名勝 氷川公園 (筆者所蔵)



写真8 絵葉書 大宮氷川公園の秋色 (筆者所蔵)

写真7に写る池の畔の枯葦の茂みの中、写真左側奥には、幾つもの杭が並んでいるのが見える。森鷗外「青年」で鴉がとまっていた杭だろうか？

写真8は、二つ並んだ池を北西側から見た風景。奥に見える池は現在では公園管理事務所となっている

九. 鷗外のディレッタンテイズム ～中島敦「耽美派の研究」～

中島敦は、昭和八年三月の東京帝国大学国文科卒業に際して、「耽美派の研究」というタイトルの卒業論文を取りまとめている。この卒業論文の主題である耽美派といえは永井荷風がその代表格の一人である。中島敦はこの卒業論文の第二章で森鷗外を取り上げて論を展開している。耽美主義の母体としてディレッタンテイズムを捉えるとともに、ディレッタントという言葉を《人生及藝術に於けるあらゆる傾向を理解し、人生が與へるすべての良き果實を自分の中に取り入れて、自分の内生命を豊富にしようといふ生活態度をもつ人を指す》とした。そして、鷗外には《このように良い意味



写真9

森鷗外「青年」復刻版
大正2.2.10 靑山書店 発行
昭和49.6.1 ほるぶ出版 発行

夏目漱石「三四郎」復刻版
明治42.5.13 春陽堂 発行
昭和63.3.25 ほるぶ 発行
(筆者所蔵)

の「ディレクティブイズム」があったのだという。引き続き第三章「永井荷風論」によれば、「野心」は永井荷風の最初の単行本であり、この発表の後、永井荷風が《森鷗外に初めて會つた時、鷗外から、地獄の花は讀んだ、と云われて感激した》のだという。この卒業論文は、二〇〇二年二月二〇日発行の「中島敦全集3」に収録されており、三百ページに及ぶ大作であるが、《以上、甚だ不完全ながらこれで此の稿を終はる》と締めくくられている。

永井荷風は、常に先に行ってしまう森鷗外の姿を、明治四十二年九月の「中央公論」に掲載の「鷗外先生」という随筆の中で、《先生はいつも独りである。一所に歩かうとしても、足の進みが早いので、《先生はいつも独りになりなつて仕舞ふのだ。：：自分は先生の後姿を遙かに望む時、時代より優れ過ぎた人の淋しきといふ事を想像せずには居られない》と記している。

十、娼妓の型と母の型 ～森鷗外「青年」～

夏目漱石の「三四郎」と常に比較される鷗外の「青年」であるが、鷗外が「青年」を執筆するに際して「三四郎」を意識していたかは不明である。「三四郎」の中で、三四郎は上京のための汽車の車中で偶然出会った女性と一晩同宿することとなる。翌朝、その女性から停車場で《あなたは餘つ程度胸のない方ですね》と言われ、自らの性格を言い当てられた《三四郎はプラット、フォームの上へ弾き出された様な心持ちがした》という場面がある。三四郎の性格がストレートかつ極めて鋭く言い当てられているの

が印象深い。ナイーヴな青年の心という点では、三四郎は「青年」の純一と相通じるところがあると思う。

ともあれ、完成度の高い「三四郎」と比べ、「青年」に物足りなさと言うか不完全さを感じさせられる理由は、「青年」が女性には二つの型があるとの主題の設定をしつつも、母の型を描いていないことにあるのではないかと筆者は考える。大宮公園の場面で大村は《母の型の女は、子を欲しがつてゐて、母として子を可哀がるばかりではない。：：娘に行けば夫をも母として可哀がる》とも言っている。「夫をも母としてかわいがる」ことを期待している男子は、平成の今日においては「マザコン！」と一笑にふされてしまうが、これも幻影の一つの型であることには間違いない。

鷗外全集に収録された「青年」には、大正二年二月一〇日靑山書店発行の単行本の巻末にはない《鷗外云》として《兔に角一應これで終とする。》との言葉が見られる。「青年」の文末に《兔に角一應これで終とする。》と森鷗外自身が付言したことにより、「青年」に描かれたストーリーは母の型の女性を描きだすための長い長いオバーチャー（序曲）であるとの位置付けが暗示されていると筆者は考える。その長い長い序曲が一つの独立した長編小説になった。そう捉えてみると、「青年」の見え方が大きく変わる。そうした長い長い序曲の中において、純一が上京してきてから大村とともに大宮に出掛けるまでの文脈もまた大宮公園での二人の青年の間の会話を通じた小説「青年」の主題の設定へと向かうための序章であり、そして、大宮公園以降に進められていく娼妓の型に係る論の展開を引き出すための舞台設定作業と捉えることができる。

純一の上京直後から大宮行きまでの「青年」の初期段階には、坂井夫人との芸術座での出会いや根岸の邸宅に坂井夫人を訪ねる場面の描写があり、その後に、《己は今日の日記を書くのに、目的地に向つて迂路を取ると云つたが、これでは遂に目的地を避けて、その外邊を一周したやうなものである。併し己は知らざる人であつたのが、今日知る人となつたのである》と描かれたことが、当時の鷗外読者に衝撃を与えたのだろう。それゆえに「三四郎」にはない「青年」のフィジカルな局面だけが妙に強く認識されること

になった。《知らざる人であつたのが、知る人となった》という今日的には何のことやらよく分からない表現が、純一の坂井未亡人との初めての性体験のことであると、識者からの助言がなければ分からない。しかし、意味を知ってから改めて読み返してみると、妙に際立って印象付けられるから不思議である。それにしても、「青年」が「三四郎」と比較の上で語られる際に、この箇所ばかりが強調されがちであることが残念である。

前述したように、「青年」の主題が「女性には娼妓の型と母の型の二つしかない」ということと「青年が文筆家として立って行く過程」を描き出すことと捉え、しかも、長編小説として一つの形を成しているものの、それは母の型を描き出すための序曲、或いは「青年」前編・後編の前編、として見てみれば、娼妓の型を描くことを主眼としている前編では性について避けて通り得ず、前編の結末として決別せざるを得ない娼妓の型の女性の象徴的存在である坂井夫人との体験を象徴的に打ち出したのだろう。これは中島敦が卒業論文「耽美派の研究」の中で森鷗外について指摘した鷗外の持つ《良い意味のディレッティズム》の現れと捉えることができる。

十一. お絹は一人遅れて辞儀をした ～森鷗外「青年」～

箱根で純一が滞在した柏屋の女中として登場したお絹は、《一人の女中が火鉢に炭をついでゐた。色の蒼白い、美しい女である》と描かれ、特別な用をする特別な女中との印象での登場であつた。しかしながら、鷗外にはお絹を娼妓の型ではなく母の型として描いていくという意図があつたのではないだろうかなどと、筆者は自らの身の程も考えずに明治の文豪の意図を深読みしている。ここで、筆者は大胆にも「箱根での坂井夫人との決別へと展開されてきた長編小説『青年』の文脈は、全てオーバーチャーであり、本論のない未完のまま終結したのではないか」との仮説を立ててみた。

これもまんざらのを外してはおろまい。「鷗外全集」掲載の「青年」の最後に付記された言葉《鷗外云。小説「青年」は一應これで終とする。書かうと企てた事の一小部分しかまだ書かず、物語の上の日数が六七十日になつ

たに過ぎない。…兔に角一應これで終とする。》がそれを強く感じさせる。事実、坂井夫人との決別の後、純一は柏屋の女中の《色の蒼白い、美しい女》お絹に気を惹かれている。次の段階へと踏み出す心の変化の現われだ。《純一はお絹と云ふ名が、自分の想像したあの女の性質に相應してゐるやうに思つて、一種の満足を覺えた。そしてそのお絹が忙しい中で自分を観察してくれたのを感謝すると同時に、自分があの女の生活を餘り卑しく考へたのを悔いた。》

これは、純一が箱根を去る朝、勘定を女中に告げた際にその女中から、《きのふあなたがお着きになると、あれが直ぐにさう云ひましたわ。あの方は本を澤山持つて入らつしやつたから、きつとお休みの間勉強をしに入らつしやつたのだつて》と、お絹のことを聞いた際の純一の反応である。

これに続き、《純一が立つて出ると、女中が革包を持つて跡から來た。廊下の廣い所に、女中が集まつて、何か呟き合つてゐたのが、皆純一に暇乞をした。お絹は背後の方にしよんぼり立つてゐて、一人遅れて辞儀をした。》とお絹の描写がある。坂井夫人が「青年」の基底を成し全般に亘つて登場し続ける一方、お絹の登場したのは終了間際の僅かばかりの間である。

そして、「青年」は、母の型を描かぬまま、次のように締めくくられる。《朝日橋に掛かる前に振り返つて、坂井の奥さんの泊つてゐる福住の座敷を見たら、障子が皆締まつて、中はひっそりしてゐた。》

十二. 小説の一章二章は到る處に ～田山花袋「一日の行楽」～

大宮公園は明治の文人たちの持つ自然観・人間観に影響を与え、明治の青年たちの姿が大宮公園に描き出された。その理由を田山花袋の作品「一日の行楽」に見ることが出来る。大宮公園を紹介する中で《探るべき名勝が尠なくない》が、《さういふ好事者は減多に居ない》と花袋が記したのはどういう意味か？ 本章ではそのあたりを掘り下げてみる。

《八重垣あたりで、茶代、旅宿料の高いのを平氣で、一夜、男同志で靜かに泊つて來るのも興味がある。生中、箱根あたりに行くよりも逸興が多い。》

花袋がこう記したのは、正岡子規が夏目漱石を大宮公園に呼び寄せたことを知つてのことだろう。もつとも漱石と子規の両盟友が会したのは八重垣ではなく萬松楼ではあるのだが。(「大宮の郷土史」第三十二号参照)

今日では明治の老舗料亭・旅館は大宮公園内に存在しないため、当時の賑わいを大宮公園内に感じ取ることは大変難しい。しかしながら、田山花袋の短い紹介文には様々な思いが巡る。《小説の一章二章は到る處にころがつてゐる》と大宮公園を評した花袋の言葉の通り、花袋が活躍した頃には、こうした料亭・旅館を巡つて、大宮公園のそここに小説のネタがいろいろと転がつていたのだろう。もつとも、花袋の弁を聞く限りでは、ころがつていたのは娼妓の型の女性像に関するネタばかりだったようだ。明治中後期における文壇、とりわけ耽美派、の取り扱っていたテーマと大宮公園のそうした雰囲気の方が一致していたということなのだろう。

「一日の行楽」における大宮公園の紹介には、森鷗外の「青年」の場面に当てはまるところが意外に多い。鷗外が「青年」の中で「蒲団」に言及したことを意識したのでろう。鷗外と花袋には交流があったことが知られている。田山花袋は、明治三十七年五月から九月まで、森鷗外が日露開戦に伴い軍医部長として従軍する第二軍に従軍記者として随行した経験を持つており、この機会に森鷗外と会っていた。明治の文壇では文人たちが互いの作品を通して盟友の作品や考え方を批判し合い、また、評価し合っていた。「青年」の箱根の場面で、画家・岡村が作家の卯・純一に向けて、文学に関して激しく攻撃的な批判をする場面がある。この場面で、当時大変

な話題となつていた花袋の「蒲団」が取り上げられている。

「青年」は明治四十三年から四十四年にかけて発表され、大正二年に単行本化された作品である。他方、田山花袋の「一日の行楽」は大正七年二月十六日に博文館からの出版。その五年後の大正十二年七月五日に「東京近郊一日の行楽」として改めて出版されている。「東京近郊一日の行楽」が出版された大正十二年七月は森鷗外が没した大正十一年七月九日からちょうど一年後である。「一日の行楽」には次のような紹介がある。

《女中にもいきな色の白い女が多かつた。》《大宮公園の旅館には、滅多に泊まれない、えらいぼりやがる》かう田舎の人は言ふが……役者と未亡人との密会、客と藝者との宿泊、さういふものを目的として建てられた旅館だ。》

ここで、《客と藝者との宿泊、さういふものを目的として》は「青年」における純一が大村とともに大宮公園に向かつた汽車に乗り合わせた芸者、《女中にもいきな色の白い女が》は「青年」における箱根の柏屋のお絹に対する純一の第一印象、そして、《役者と未亡人との密会》は「青年」における純一が出向いた箱根・福住の萬翠楼で遭遇してしまつた坂井夫と画家・岡村の親密な場面、を指しているのではないかと想像される。

しかし、森鷗外が大宮公園を訪れ、滞在したという記録は、残念ながら、今までのところ、どこにも見つからない。

十三、一 番列車が霧の中から現れた　　↳ 森田草平 「煤煙」 ↳

鷗外は「青年」において、箱根・福住で坂井夫人とともに箱根に滞在していた画家・岡村による文学批判の対象として、田山花袋「蒲団」とともに森田草平の「煤煙」も取り上げ、次のように論じている。「青年」の中で純一が坂井夫人と決別し、文筆家として立つ決意をするきっかけとなつた場面における描写である。

《若い文學者の噂が出る。……次いで話は作品の上に及んで、「蒲団」がどうの、「煤煙」がどうのと云ふことになる。意外に文學通だと思つて、純一が聞いて見ると、どれも讀んではゐないのであつた。純一には此席にゐるこ



写真10 絵葉書
仲山道大宮公園料理旅館
八重垣庭園 (筆者所蔵)

とが面白くない。：：世間に起る、新しい文藝に對する非難と云ふものは、大抵此岡村のやうな人が言ひ廣めるのだらう。：：攻撃的批評に、社會は雷同するのである。：：蒲田や煤煙には、無論事實問題も伴つてゐた。併し煤煙の種になつてゐる事實こそは、稍外間へ暴露した行動を見たのであるが、蒲田や其外の実問題は大抵皆文士の間で起したので、所謂六號文學のすつば抜きに根ざしてゐるのではないか。》

森田草平の「煤煙」は、明治四十一年三月の自らと平塚雷鳥との心中未遂事件を題材にしていると言われる。この事件のとき森田草平は二七歳、平塚雷鳥は二二歳である。事件後、森田平は漱石のところに転がり込んだ。この事件から自らが受ける大きな痛手を回避する意味もあつたようだ。漱石の力添えもあつて、「煤煙」は明治四十二年一月一日から五月十六日まで朝日新聞に連載された。

この直前の連載は漱石の「三四郎」(明治四十一年九月一日から十二月二十九日まで)である。「三四郎」に登場する美禰子は平塚雷鳥がモデル(漱石が門下生の森田草平から聞き取つた「煤煙」の朋子の様子を基に作り上げた女性像)である。また、「煤煙」連載終了後の六月二十七日には漱石の「それから」の連載が開始する。「三四郎」「それから」「門」は夏目漱石の三部作だが、それらが朝日新聞に連載された際、間に「煤煙」が挟まつていたことは今日では殆ど知られていない。なお、「それから」の代助は「煤煙」を勧められて読んでみたものの、自分との懸隔を感じている。

閑話休題。西那須野駅へと向かう二人は田端の停車場で夜十時五分発の高崎行き最終列車に乗る。途中大宮で下車。翌朝の汽車を待つために一泊している。この際の様子を「煤煙」の中で描かれている。一部を引用する。

《やがて大宮へ着く。要吉は女を促して汽車を出た。明日の朝汽車を待つて東北へ向ふ積りである。他に行くべき場所も手段も残されないやうに、此處で降りたのは何のためか分からない。二人は停車場を出て大通りを一町許り行つたが何處の家も寝鎮つてゐる。唯一軒大戸を開けた家を見附けて、その二階へ上つた》

こうして要吉と朋子は大宮に到着した。大宮の宿で一夜を過した二人

は翌朝一番の汽車に乗る。慌しく宿を出る様子が次のように描かれている。《もう汽車の着く時間ですな。》朋子も何やら落着かぬらしい。《街には朝霧がか、つて、未だ人通りはない。》《停車場の振鈴が鳴る。二人は遠て、駈附けた。プラツトフォームに立つて、待つ間程なく、上野發の一番列車が霧の中から現れた。》

大宮での一夜の場面で、朋子が要吉から借りたダンヌンチオの「死の勝利」を、いろいろな物を焼き捨てるときについて間違えて火の中に放り込んでしまったことを詫げる。そのとき要吉には《反古を焼く姿が眼に泛んだ。》東京を發つ前に朋子が友に宛ててしたためた最後の手紙には《：：われは決して戀のために死するものに非ず、自己を貫かんがためなり、自己の體系を全うせむがためなり、孤獨の旅路なり。：：明治四十一年三月二十一日》と記されていた。「煤煙」は《自分が息絶えて、男の心の中の記憶と化した後、この遺書を読んだとしたら、男の失望は何んなであらう。》と続く。

大宮の夜更け、朋子は《貴方の小さい時分の話をして下さい。私は未だ貴方のことは何も知らない。》と言う。《小さい時分の？》との要吉の反応に《二人が現在してゐることは、全然關係のないことが可い》と続ける。

要吉にしてみれば「死の勝利」を焼却された以上にショックだつただろう(後述する)が、朋子はそのまま自分が五つのお話の話を続けた。氷獄での心中のために踏み込んだ山中で要吉は生きる方向に心を転換するのだが、大宮での一夜が要吉の心の転換を理解する鍵となつてると筆者は考へる。

ここで、「煤煙」の時点をずっと巻き戻す。眞鍋朋子と知り合つて間も無く、膝の関節が硬張つて曲げられなくなり、急性の痲痺質斯と診断された要吉は小石川茗荷谷の狩野病院に入院する。見舞いに來た朋子に容吉は「死の勝利」を貸した。後日、要吉が《熱砂の上に百合の花が咲く。：：見る間に咲いて見る間に凋む。その蕊を開いて見ると、大抵の花には蕊が一疋づ、強い香に蒸されて死んでると云ふのです。》と言いつつ、これを読んだかを問う場面があるが、朋子の答えは《い、え、未だ。》だった。他方、朋子が書いた草稿「末日」に要吉は目を通す。要吉は「末日」は《自意識の強い女が意氣地のない男を振棄て、信州隠れに行くといふ筋》だと読み解

きつつ、その内容から、朋子を《男を愛すると云ふことよりも、先づ男を棄てることを描いてゐる女かも知れない》とも感じている。

要吉の故郷を描いた「煤煙」の前半は鬱々として暗い。要吉の祖父が老木を切り倒したことに起因する因果と、それから連なる要吉の生い立ちに對する疑念に、悶絶するほどの思いがあったことが描かれている。この前半がなければ後半が理解できない。漱石は「煤煙」の後半に描かれた心中未遂事件よりもこの前半の方が出来が良いように思われると評している。

要吉はこうした過去を断ち切つて自分を救つてくれるものは誘惑の力であり、朋子がそれであると見出した。そして、九段の招魂社近くのある家で、要吉はそれを朋子に打ち明け、《貴方はこの秘密を口外することは出来ない。つまり私はこの秘密を貴方に握らせて、貴方を私から離れることが出来ないやうにしたのだ。解つたか。》と言うのだが、朋子はこれには何も応えなかった。要吉は終始朋子に翻弄され続けた。要吉は火、朋子は氷。要吉の思いとは裏腹に朋子は最後まで要吉と同じ方向を向くことはなかった。

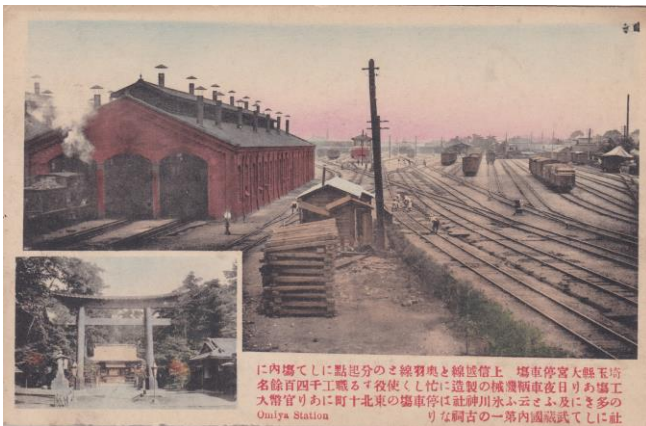


写真11 絵葉書 埼玉県大宮停車場（筆者所蔵）

「上信越線と奥羽線との分岐点にして場内に工場あり 日夜車両機械の製造に忙しく使役する 職工千四百余名の多きに及ぶと云う 氷川神社は停車場の東北十町にあり 官幣大社にして武蔵国内第一の古祠なり」

たくさんの線路の敷設された大宮停車場の様子を伝えるこの絵葉書には手彩色が施されている。左隅に写る工場には石炭を山積みした蒸気機関車が入って行くのが見える。その下側、絵葉書の左下には拝殿の前に鳥居の配置された氷川神社の写真も添えられている。

十四 お絹は門まで送って出てしよんぼり立つていた。森田草平「煤煙」

森鷗外は「青年」の執筆に際し、「三四郎」を意識していたと言われるが、むしろ、森田草平の「煤煙」を強く気に掛けていたのではないだろうか？ とは言え、平塚雷鳥が漱石門下生の森田草平の相手方であることを考えれば、仮に意識はしても、それを作品に描くことにはいろいろ配慮があっただろうと想像される。

鷗外は「青年」の中で、画家・岡村と純一とのやり取りに「煤煙」を登場させることによって、読者を「煤煙」の中へと誘った。「青年」では「煤煙」の具体的な内容への踏み込みはないのだが、「青年」のクライマックスで、鷗外は、純一の岡村に対する言葉を借りて、世の中に流布された所謂煤煙事件に対する好奇の目を大いに批判している。更に、それに加えて、要吉の鬱々とした故郷の過去のしがらみに係る悶絶との決別が「煤煙」の後半に描かれた心中事件の背景に深く根ざしていることが看過されがちであることに對する痛烈なる批判を加えている、と筆者の目には映る。

ところで、「煤煙」とは、高度経済成長以降の日本においては公害を想像させる決して心地の良い言葉とは響かない言葉だが、明治末の頃においては首都東京のご真ん中に立ち上る砲兵工廠の煤煙は日本の発展を象徴的に示すある種心地の良いものだったのかも知れない。「煤煙」というタイトルは《その頃水道橋にあった砲兵工廠の煙突から、夕暮れの空に幾筋となく黒煙が棚曳いてゐるのを見て、感傷的な氣持ちに打たれて思いついたものである》と、森田草平本人が昭和十五年五月二十五日に記している。

「青年」のクライマックスで登場する画家の名前は岡村。岡村は純一に對し「煤煙」を文学批判の対象の一つとして語るが、実はそれを読んではいない。岡村という画家の名前が、後に平塚雷鳥と結婚することとなる画家・奥村博史の名前と重なる。「青年」の中で漱石は附石、鷗外は鷗村であることから、岡村が奥村を想像させるのだ。《兎に角一應これで終とする》として鷗外が「青年」の「昂」連載を終了するのは明治四十四年八月、そして、「青年」単行本化が大正二年のことである。一方、明治二十二年生ま

れの奥村が三歳半年上の雷鳥と出会ったとされるのは大正元年八月であり、奥村の名が画家として世に知られることとなるのは大正三年の二科展入選からである。岡村が奥村を想像させるとは言え、それは偶然の一致でしかないのだろう。それにしても面白い偶然だ。いや、本当に偶然だろうか？

鷗外の「青年」につながる偶然は更に重なる。「煤煙」において、朋子と共に金葉會に参加している女性のうちの一人は《前身は吉原で名の賣れた藝者でおちやらと云った。》また、要吉の母の名はお絹であり、故郷を離れる要吉を見送るお絹は《今朝立ちがけに門迄送つて出て悄然立つてゐた》のだった。更に、お絹が要吉の伯父と呼ぶ人物（要吉の父の生前からの知り合いであり、父の死後頻繁に家に入り出すようになった。要吉は実の父ではないかと疑っている）は画家である。偶然以上のものを感じる。

平塚雷鳥らによつて「青鞥」が創刊されたのは明治四十四年九月。鷗外が「青年」の連載を終了させた翌月のことだ。偶然は重なるものである。

ところで、新しい女性たちによる「青鞥」には、その創業時から、森鷗外の妻・森しげ子が賛助員として参画している。鷗外は妻を通じて平塚雷鳥の私生活にも触れることができたわけだ。気になるところである。

ともあれ、《兎に角一應これ終とする》として鷗外は筆を置いたので、「青年」のその後については読者自らの想像に委ねられた。純一の文筆家としての志や母の型の女性お絹との関係がどうなっていくのか、また、画家・岡村と坂井夫人の関係がどうなっていくのかには様々な想像が巡る。

十五、大宮公園の転換期について ～大正十年の改良計画～

今はなき氷川神社の鳥居や、明治から大正・昭和にかけての氷川神社の鳥居の変遷について取りまとめたいと考えて筆を取ったものの、筆は遅々として進まなかった。参考にした寺田寅彦の随筆「写生紀行」に描かれた大宮公園の情景に関心を深め、大宮公園の成立と大正期における大宮公園の転換期のことに関心することとなったからである。

明治初頭に日本全国に公園を整備する動きが出た際に構想された大宮氷

川公園の整備に際して、公園の敷地を分譲して料亭や旅館を誘致する取り組み（今日的な言葉で言うなら「民活（民間活力導入）」による公園整備といったところか）が為された。公園内の木々に囲まれた雰囲気と見沼川畔の蛍の風雅な様子が相俟って、更に、東京からの汽車の便の良さもあって、公園事業は成功し、多くの人々が東京から訪れることとなった。その賑わいを示す数字としては、昭和初期には花柳界からの収入が大宮町歳入の四分の一を占めるまでに至ったと伝えられている。

このように自然を愛でる理由で料亭に集う者たちで賑わう一方で、大宮公園は東京の女学校等の遠足の目的地ともなり、多くの人々が上野発の汽車を使って訪れるようになった。裕仁親王（昭和天皇）が明治四十一年十一月二日に学習院の遠足で大宮公園を訪れた写真も残されている。

《この附近には、探るべき名勝が尠くない。…しかし、大宮公園に行く人には、さういふ好事者は減多にない。》と田山花袋は大宮公園を評しているが、そのような「好事者」も多くあったことも事実であり、むしろ地元行政はそうした訪問者の増加を望んだことだろう。そうしたことを背景に、大正十年の公園改良計画策定へと向かった。この当時の大宮駅から大宮公園内の様子は、寺田寅彦が「写生紀行」にたいへん詳細に描いているので、是非原典を参照して頂きたい。

大正十年に本多清六博士らによって改良計画が描かれたのを境に、大宮公園はスポーツの色合いが濃くなっていく。女子学生が汽車で東京から遠足にやってきたのに対して、東京高等師範学校の男子学生たちの長距離走の目的地になっていたのは興味深いところである。折りしも、一九二〇年にオリンピック・アントワープ大会が開催され、地元出身のアスリート蓮見宏選手が八〇〇mと一五〇〇mに出場していた。こうしたことも、大宮公園をスポーツの殿堂にするという構想の背景にあることは間違いない。この考察を裏付ける史料を見つけ出したものである。時代は下り、昭和十五年には、皇紀二六〇〇年を祝し、東京オリンピックが計画されたものの、世界的な情勢から中止となった。このとき造成された競技場は昭和四十三年開催の埼玉国体のスタジアムとして利用された。

大宮公園は、明治十七年に正式に公園認可され当初県立として整備されたが、明治二十四年九月からは大宮町が管理することとなる。そして、明治三十一年四月にはその管理が大宮町から埼玉県に戻っている。こうした管理者の変遷も公園の性格付けに影響したことだろう。公園経営管理の費用と収益は管理者である行政体の収支にも大きく関係するのだから。

一葉、子規、漱石が訪れたのは大宮町管理の頃のこと。一葉の日記によれば、大宮公園は、面白き、可笑しき、洒落た、粹な、風流な、雅なところとして広く知られるに至っていたようだ。折りしも、明治十八年に大宮駅が開設されて東京から大宮への鉄道の便が良くなってきた頃である。

大宮町営の頃に文学作品に描かれた大宮公園、森鷗外や永井荷風や田山花袋が描いた明治後期の大宮公園、寺田寅彦が訪れた大宮公園、太宰治が訪れた昭和前半の大宮の町は、それぞれ異なる雰囲気を持っていた。

本稿では森鷗外「青年」を中心に据えて、文学作品に描き出された大宮公園についてまとめた。大宮公園を散策する際の参考になれば幸いである。

【附録1】青春の日本の使命 ～森鷗外「羽鳥千尋」～

《羽鳥千尋は實在の人物である》と書き出す森鷗外の「羽鳥千尋」を私に紹介してくれたのは森鷗外記念会の山崎一穎会長である。山崎会長によれば、「青年」の純一は様々な遍歴の後に文筆活動に打ち込むこととなった恵まれた青年である一方、羽鳥千尋は地元の旧制中学校を首席で卒業するほどの俊才でありながら目指した医学の道も志半ばで病で命を落としてしまった不幸な青年である。明治の青年像としてこうした両極の青年像を描いているのが鷗外の優れたところである、と山崎会長から教えて頂いた。

そこで、筆者は羽鳥千尋の足跡を追ってみた。群馬県立高崎中学校の校友会が発行する「群馬」という同校在校生と卒業生を対象とした刊行物の中に羽鳥千尋のエッセイを見付けることができた。

明治三十七年十一月発行の「群馬」第四号には、羽鳥千尋が寄稿した『青春の日本』の使命を自覚せよ」が掲載されている。羽鳥千尋はその文末を《あ、人よ、矛を執つて起つ前に、沈思せよ、憧憬せよ、然かしてこの「青

春の日本」の絶大の神命を自覚せよ》と締めくくっている。

鷗外は羽鳥千尋からの熱心な手紙を受け取り、その極めてゆたかな表現力に感じるものがあつたのだろう。忙しい陸軍軍医の執務が続く中であつて、羽鳥千尋からの医学を学ぶための力添えの申し入れを受け入れた。

【附録2】鷗外とは何か？ ～三島由紀夫「作家論」～

三島由紀夫は、昭和四十五年十月三十一日発行の「作家論」で作家を論じている。その冒頭に掲げられたのが森鷗外である。三島は複数回に亘つて《森鷗外とは何か？》と自問自答する。そして、《戦前の日本では、「鷗外とは何か？」などといふ疑問がそもそも起る余地がなかった。鷗外は鷗外だった。それは無条件の崇拜の対象であり、とりわけ知識階級の偶像であつた。》と指摘し、《文学が、気品乃至品格という点から評価されるべきならば、鷗外はおそらく近代一の気品の高い芸術家であり、…純良な檜のみで築かれた建築のように、一つの建築的精華なのだ。》と論を展開している。その一方、《明治政府の理念の理想的具現であるやうな鷗外像、…知的男性像は、思ふにおそらく、今の若い世代の脳裡からは消え去り、消え去らぬまでも、魅力を失つてゐることは容易に察せられる。》と大変手厳しい。

その上で、三島は森鷗外の「青年」について《当時の文壇でも高く評価されなかつたのみならず、今日もなほ、「雁」に比べて、名声の高い作品とは言はれない。しかし、明治末期の二十歳の青年小泉純一の、明澄な感情教育は、つねに衰へない清らかな魅力を湛へてゐる。》と言うのだ。

三島は「青年」に描かれた純一を《ナイーヴな心で、一時代の知的関心を代表して》いるとして、《どんな時代にもかはらぬ（現代でさへ）青年の潔癖と羞恥を典型的に表現》されていると評した上で、《私はこの作品が、「坊ちゃん」などよりも、現代の青年にもつともつと読まれるべきだと考へてゐる》と「青年」の価値を認めている。日本の経済社会がまだまだ若かつた頃のことである。それから四十年余りの年月が流れた。平成の今日になつても、いや、若者にとつて厳しく難しいこの時代であるからこそ、三島由紀夫の「青年」に対する評価は十分に通用するものと筆者は信じる。

【附録3】大宮盆栽村と森於菟の邸宅

盆栽町は大正十二年の関東大震災後、東京千駄木団子坂界隈の植木屋たちが集団で移り住んだことにより形成された。近年の世界的な盆栽ブームもあり、国内外に大変有名になった。なお、千駄木は鷗外の旧居宅・観潮楼の在った土地でもある。

《観潮楼は私の魂の故郷である。》《父は初め、明治二十四年団子坂上の見晴らしのいい地所を求めて：》とは、昭和十八年「観潮楼始末記」に、森鷗外の長男・森於菟が鷗外一家の居宅について記した言葉だ。二〇一〇年一〇月一五日にみず書房から出版された森於菟のエッセイ集「毫碌寸前」に大宮盆栽村の邸宅から東京に通う於菟の様子があるので引用する。

《初夏の晴れた暁、薫風について走る郊外電車の中である。私は長男とならんで二人ともだまって腰かけている。私は大宮から本郷の大学に通うために毎日御徒町まで乗るので長男は赤羽で乗りかえて、ある七年制の高等学校に行くのである。》《次男は本郷区誠之小学校に通うために長男よりももう一つ前の電車にのり、大宮町の小学校に行く幼い三男は私より後に家を出る。》

昭和五年、大宮公園からほど近い盆栽村に森於菟が邸宅を建てて一家で移り住んだ。昭和十一年二月に於菟が台湾帝国大学に赴任するまでの間、大宮盆栽村で過ごしたことを、於菟の五男・森常治が二〇一三年十月十五日発行の「台湾の森於菟」に次のように記している。

《大宮盆栽村は当時、大森、田園調布、成城学園、さらには鎌倉といったモダンな新興住宅地に住むことが一種の流行となった当時の風潮にあわせる

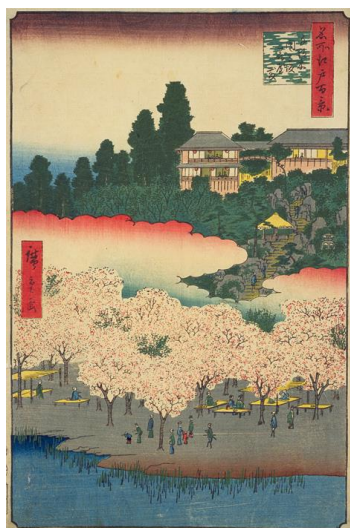


写真12
名所江戸百景
千駄木団子坂花屋敷
(出典：国立国会図書館
デジタルコレクション)

安政年間における千駄木団子坂の景色が描かれている。大正12年の関東大震災後、この大地から植木屋職人が移り住んだことから大宮盆栽村は形成された。

かたちで選ばれた地であった。《そこは氷川神社を参拝するとき下車する駅だが、森於菟がその地を選んだのにはおそらくわけがあり、それは父親鷗外の長編小説作品「青年」に、その主人公、大村純一が氷川神社を訪れる場面が描かれていたからであるう、と思われる》(※筆者注：大村純一はママ)

【附録4】弱きものよ汝の名は男なり 森於菟「毫碌寸前」

「もはや戦後ではない」と言われたのが昭和三十一年。長嶋茂雄が巨人軍に入団し、東京タワーが完成したのが昭和三十三年。この頃「ウーマン・リブ」という言葉が世の中を賑わせていたようだ。それから二年後の昭和三十五年、森鷗外の長男・森於菟は、そのエッセイに《ぼくは医学者の立場からもともと生理的には男性よりも女性が上位にあると思っっている》とした上で、次のように書いている。鷗外「青年」の純一や漱石「三四郎」の三四郎のナイーブさともある意味相通じるものを感じさせる言葉である。《世界の文化は弱き性である男性の恐怖心に駆られた足掻きの結晶なのである。卓れたる女性諸姉よ、男性こそ弱きが故に愛すべき性なのです。》

【附録5】メーテル 松本零士「銀河鉄道999」

大宮公園に隣接する盆栽町に在るさいたま市立漫画会館は昭和四十一年の開館。近代漫画の先駆者・北沢楽天の晩年の居宅跡である。

平成二十五年九月十四日から十一月二十四日にかけて、漫画会館で、松本零士の企画漫画展が開催された。貴重な原画が多数展示され、初日には松本零士によるトークショウも催された。

松本零士の描く女性はいずれももの静かで、長い髪と睫を持ち、細身ですらりとした長身。銀河鉄道999のメーテルがその典型であるが、宇宙戦艦ヤマトのスターシアや森雪も同様のスタイルである。そして、余り知られていないかもしれないが、昭和四十九年に単行本化された「セクスアイド」に登場するユキ7号という先駆的なキャラクターが存在し、やはりすらりとした細身の姿をしている。ユキ7号は引き続き松本零士作品に登場する女性像の原型となっており、言っても過言ではない。そして、セク

サロイドのユキ7号が娼妓の型を取っているのに対し、銀河鉄道999のメーテルは母の型の典型である。メーテルの名の語源は母を意味するギリシア語であるとも言われる。松本零士自身が『「セクサロイド」はその後のためのプロトタイプ的な作品』、『「セクサロイド」は私の夢でありました』と述べている。セクサロイド・ユキ7号も銀河鉄道999のメーテルも「男子の構成した幻影」であり、虚の空間に描かれた夢のようなものだ。

松本零士は時を隔てて二つの型の女性を作品に描いた。それらの女性像が、森鷗外が大宮公園を舞台に展開した女性観と整合しているのが大変興味深い。筆者は、鷗外「青年」の最後の場面に描かれた柏屋のお絹はきつとメーテルのような容姿をしていたのであろうと想像している。

大宮公園を舞台に描かれた作品ではないが、鉄道の町大宮に在る近代漫画の先駆者・北沢楽天の住居跡である漫画会館を訪れた銀河鉄道999の原作者松本零士に敬意を表し、平成二十五年秋の企画漫画展に掲げられた群青の美しい背景に描かれた銀河鉄道999の原画を心に思い浮かべつつ、メーテルについて述べた。鉄道の醸し出す希望の旅立ちの浪漫を追って。

【附録6】萌えの型と癒しの型 ～平成の若者事情・秋葉原を中心に～

番外編として、娼妓の型と母の型という明治の文豪が打ち立てた女性観に係る視座が平成の今日にも通用可能かどうかについて、日本の情報の最先端を行く場所の一つである秋葉原における今日的指向の方向性に触れつつ、少し考えておきたいと思う。

東京・秋葉原は、「アキバ」のほかに「AKB」などと略記され、昭和の戦後以来の電子工学的ハードウェア指向の街から、オーディオ・ビジュアル系やパソコン系の街を経て、今日ではアニメ、フィギュア、メイド喫茶などのいわゆるサブカルチャーの聖地へと変貌を遂げた。これらに共通するのは「おたく」と称される指向性である。この呼称が導入された一九八〇年代後半には漫才ブームが到来し、経済バブルと相俟って日本の社会が明るく派手になっていく中で、「明るい」の対極として「暗い」印象が「おたく」に与えられていた。「おたく」の語源については諸説あるが、会話の

際、相手に「きみ」とか「あなた」ではなく、「おたく」と話しかける若者を「おたく」と呼ぶようになったようだ。この頃、「おたく」は概ね「言葉少なく、人との付き合いより機械をいじっていることの方が好きで、自分の趣味の世界では誰にも負けないほどの深遠な知識と情報を持つ、十代から二十代の内向的な男子」を指す言葉だった。平成の今日、「おたく」は極めて趣味性の高い特定分野の専門的な人物を指す言葉として定着した。そうした「おたく」の聖地秋葉原の街頭で国会議員が有権者に向けて語ることが若者との対話の象徴とも見られている。今日のアキバには、秋葉原電気街の真空管と電子部品とアルミシャーシの金属的な残り香は感じられるものの、ハードウェア指向の職人肌の人種は絶滅の危機に瀕している。

最先端の若者文化の街であり続けるアキバを見るに、平成の若者を語るためには、森鷗外が「青年」で導入した娼妓の型と母の型だけでは不足であるようだ。萌えの型と癒しの型を基軸に加え、虚像を描くための虚数軸を持つ複素空間へと座標変換を加える必要がある。ここで、癒しの型は銀河鉄道999のメーテル的な母の型に近いがそのものではない。また、萌えの型は癒しの型に若干の娼妓の型を加えた形態と捉えるのが適当だろう。なお、今日の氷川神社や大宮公園には「萌え」を感じさせるものは見当たらない。「萌え」に神社に係る事例としては久喜市鷲宮（旧北葛飾郡鷲宮町）の鷲宮神社を挙げることができる。鷲宮神社は、テレビアニメ「らき☆すた」（平成十九年放送）の放送を機に巻き起こった全国的なブームの地だ。地元では「らき☆すた」を中心に据えた町おこしにまで発展した。テレビ放送終了後このブームは下火にはなるどころか、「聖地巡礼」と称したアニメファン達の動きが年を追うごとに益々盛んになってきている。

【後記】

筆者はこれまで富士山レーダー建設を描いた「富士山頂」など自然に挑んだ人々を描いた新田次郎の作品を好んで読んできた。そこに描かれたのは自然への挑戦、自然との闘いであった。今般、大宮公園を描いた明治の文人たちの文学作品に触れてみて、同じ自然と人間を取り扱う作品ではあ

るものの、取り上げ方の方向性の違いには目を開かされた。森鷗外の「青年」は明治四十四年の成立。このとき鷗外は四十九歳。鷗外自身が朱夏を過ぎ白秋に近づこうというときに青年の姿を描いた作品である。こうしたことを念頭に、ドイツから帰国直後の明治二十三年、鷗外が二十八歳のときに描いた「舞姫」などと比較してみるのも一興であろう。また、「青年」は、本稿で取り上げた他のどの文人のどの小説よりも後の成立である。各作品を読むときこのことを意識してみると面白い。ところで、文学作品に触れるとき、その時代背景を頭の片隅に置くことが大切なのは今更声高に言うまでもない。明治の文人たちが文筆活動をしていた頃には、ネット上の動画コンテンツはもちろん、テレビもラジオもなかったのだから、小説というメディアが社会や人々に与えた影響は今日の比ではなかったろう。

森鷗外は明治四十年に陸軍軍医総監・陸軍省医務局長まで上り詰め、大正五年までその職を務めた。その鷗外について永井荷風が言うような先進的で独創的な発想を持つ『時代より優れ過ぎた人』の姿は、昭和の時代の政府高官の一部にも当てはまった。追いつこうとしても先に行かれてしまふのだ。そういう官僚が居た。世は平成となり、日本の社会が円熟期に入ると、社会の様子は一転した。平成二十三年春の震災がそれに追い討ちをかけた。時代を先取りした先進的なことを言う（と、自らのことをそう思っているような）大人は、若い者から無視されるようになった。

平成の今日、「青年」という言葉は死語となり使われなくなって久しい。しかし、「大人」という言葉は生き続け、「裏切られた青年の姿」だけが残った。日本の社会全体が青春から朱夏を通り過ぎ、白秋へと向かっている。平成の大人たちは、やがてやって来る玄冬に備えねばならない。

【お詫びと訂正】 第三十三号 四十七頁。謹んで訂正致します。

- 誤 写真六 絵葉書「官幣大社樋川神社第二鳥居」
- 正 写真六 絵葉書「官幣大社氷川神社第二鳥居」
- 誤 写真七 絵葉書「大宮籾川公園池畔ノ眺望」
- 正 写真七 絵葉書「大宮氷川公園池畔ノ眺望」



写真14 大宮駅改築・大宮ステーションビル開業 10周年記念入場券 52.10.3 東京北鉄道管理局 (筆者所蔵)

裏面には、「開業当時(明治18年)は、駅長外8名。線路は一本で列車は上野～熊谷間を毎日3往復運転していた。」との大宮駅についての解説とともに、この写真について、「下の写真は初期の駅舎(撮影時は昭和のはじめ頃と思われる) 中央の建物は売店で「煙草小賣所」の看板が見られる」と解説されている。



汽		上野	
車	下	上野	下
上野発	六時四十分	上野発	六時四十分
赤羽発	六時五十分	赤羽発	六時五十分
浦和発	七時	浦和発	七時
大宮発	七時十分	大宮発	七時十分
蓮田発	七時二十分	蓮田発	七時二十分
喜喜発	七時三十分	喜喜発	七時三十分
栗橋発	七時四十分	栗橋発	七時四十分
古河発	七時五十分	古河発	七時五十分
間山発	八時	間山発	八時
小山発	八時十分	小山発	八時十分
小金発	八時二十分	小金発	八時二十分
石橋発	八時三十分	石橋発	八時三十分
宇都宮発	八時四十分	宇都宮発	八時四十分
長久保発	八時五十分	長久保発	八時五十分
矢板発	九時	矢板発	九時

写真13 明治27年4月改正 上野青森間時刻賃金表 仙台市国分町四丁目旅店瀬戸勝次郎版(部分) (筆者所蔵)

写真15 絵葉書 東京駅 (筆者所蔵) 周辺の土地がまだ造成中の珍しい東京駅開設当時の絵葉書。本稿の内容とは直接関係ないのだが、平成26年12月20日の東京駅開業100周年を祝し、この絵葉書を掲載する。